



文明のクロスロード

— 海の道むなかた館の誕生 —

『新修宗像市史』現代部会から

海の道むなかた館（宗像市郷土文化学習交流館）は、平成二十四（二〇一二年）四月二十八日に開館した博物館類似施設です（宗像市深田五八八）。本館は宗像大社辺津宮に隣接し、世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群のガイダンス機能と宗像の歴史文化を展示・解説・調査する博物館機能を有し、図書館（宗像市民図書館深田分館）などを併設しています。

平成の大合併

海の道むなかた館の建設に至るきっかけのひとつが、平成の大合併でした。その九州第一号（沖繩を除く）として、平成十五（二〇〇三）年四月一日には旧宗像市と玄海町が合併して宗像市が誕生、十七（二〇〇五）年三月二十八日には大島村を編入合併し、現在の新宗像市になりました。

このことにより、福岡市と北九州市のベッドタウンとして発展した旧宗像市に、宗像大社をはじめとして県内屈指の漁獲量を誇る鐘崎漁港、風光明媚なさつき松原を有する玄海町と、海的正倉院・沖ノ島とともに神の島を守り続けてきた大島村が、まさにひとつになりました。

歴史的意義を語るならば、古代から

大陸文化の窓口になってきた宗像は、航海安全の神である沖ノ島祭祀を中心として大陸に通じる南北の道と、日本海側の海女の発祥地といわれる鐘崎から、近世以降、日本海沿岸を北上しながら、多くの移住地や枝村を形成していった海女の日本海ルートがクロスするまちとして、歴史博物館の必要性を高めたのです。

資料館の統廃合

さらに合併という経緯の中で、平成十七年に策定された「第一次宗像市総合計画」では、旧各町村に建設されていた複数の資料館の統廃合がうたわれました。それにより、大島村民具資料

館、玄海町民俗資料館の二つの資料館は、アキシス玄海を平成二十三（二〇一一）年度に改修することで、海の道むなかた館として統合されました。ただし、その後大島村民具資料館は平成二十九（二〇一七）年七月に大島交流館として再開を果たし、玄海町民俗資料館の建物は、平成二十二（二〇一〇）年四月から岬地区コミュニティ・センターとして引き継がれています。



旧大島村民具資料館



旧玄海町民俗資料館

文明のクロスロード

宗像市の地理的特性は、アジア大陸に近接しているという立地だけでなく、北に海が開き、釣川という河川を中心に沖積地が広がり、その周囲を山が囲むという自立型の生態系基盤を有している点にあります。海の道を往来してきた交流の担い手である海人は、沖ノ島祭祀をはじめとして、日本や宗像のルーツを探る主体といえます。また、沖積地に広がる農耕文化の担い手も、大きな農業生産基盤を築いてきました。

海の道むなかた館は、宗像の歴史をひもとくにあたり、世界遺産のガイダンス施設として、また歴史文化の拠点施設として、新たなストーリーづくりを進める発信拠点といえるのです。

（現代部会 清水比呂之）



海の道むなかた館